三國七高傳傳圖會

本朝之卷

三

八漢13
605
3

東洋文庫圖書

へ 18

三國七高僧傳圖會本朝之卷目録

源信僧都傳

第一 源信幼稚感霊夢並従旅僧登北嶺

第二 源信布帛餽母却蒙諫言

第三 謁空也源信問浄土往生

第四 源信遇母臨終并撰往生要集

第五 朱仁聰見源信驚嘆博覧

第六 多田満仲發心並迎接會修行

第七 平維茂都文士等逝去

横川楞厳院源信和尚
又稱惠心僧都

從第寂心法師
俗稱少内記慶保胤

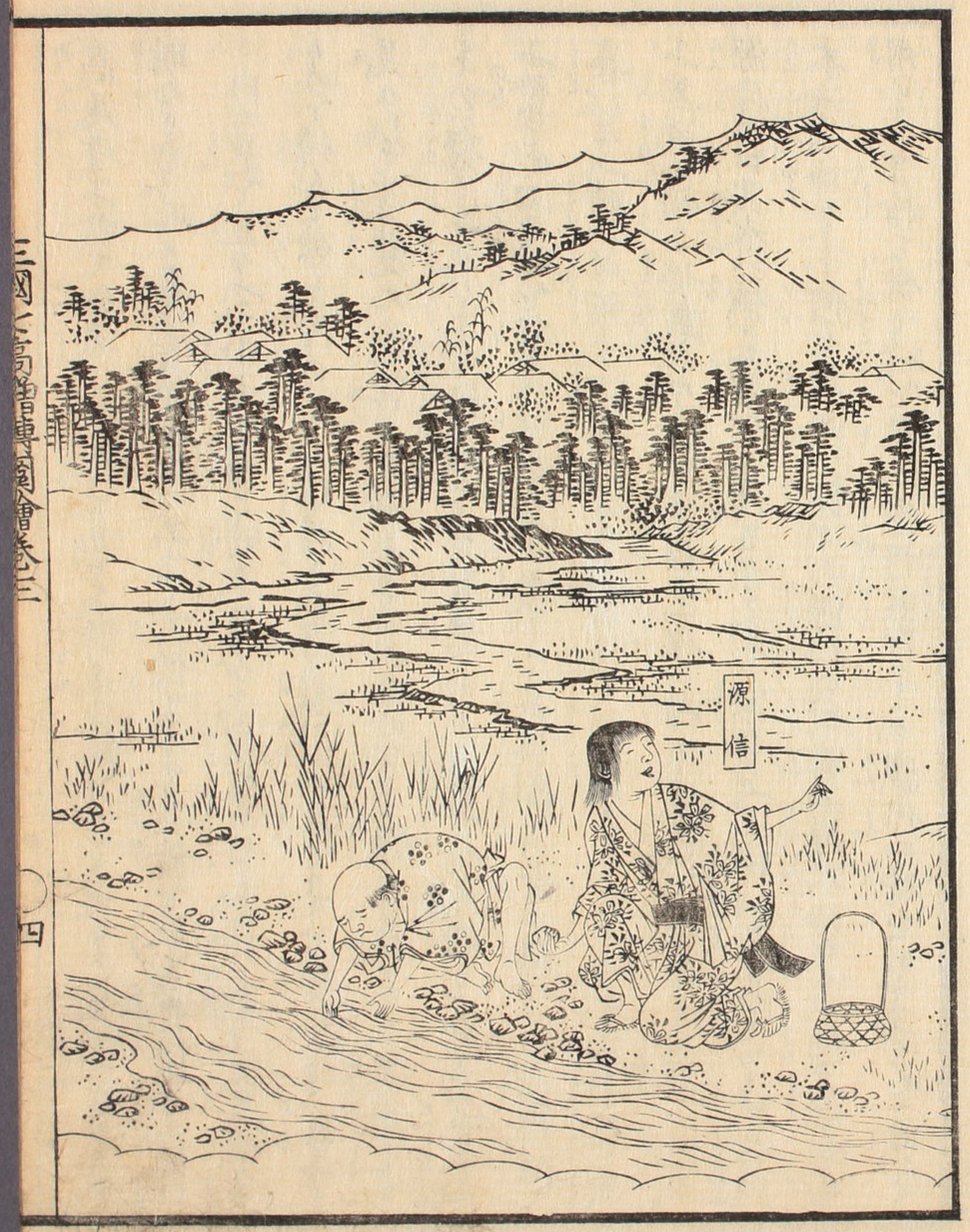
第八　源信入水想觀并加茂明神霊異
第九　源信遷化奇瑞
第十　往生要集三界六道之説
第十一　源信自画自讃文

三國七高僧傳圖會本朝之卷

杓杞菴一禪居士編輯

源信僧都傳

本傳曰釋源信。姓ハト部氏和州葛下郡當麻郷の人也。父ハ正親。母ハ清原氏夫婦ふ子ふ。同郡の高尾寺なる観世音を祈ること三年。母の夢ふ僧来て美玉を授ると見て懐姙を。此より已て母挙止必ず禮を正しくし。葷腥を食せず。天慶五年ふ生る。天性頴悟。風姿允児ふ秀ぐ。父母甚これを寵愛を。七歳のとき父を喪ひ。ふ父遺言して曰。汝必ず出家修道して。つぐ菩提を助けよと。夫より已来常ふ是を念じて措ず。或日斎戒して高尾寺ふ詣て。観音の前ふ誓て曰く。我必ず父の遺命を奉じて出家せん願くハ大悲照鑒しめよと。夫より日々ふ詣で。其尊像を拜すること三年。又日々ふ兀の塔を作ること。一千基ふ満て以て父の追福ふ薦む。歳九才ふして夢に


源信

源信幼稚にして
旅僧と問答
しかり
旅僧

高尾寺に詣で。經藏の中に入て見るに。許多の鏡ありて。大なるあり。小さあるも。明るあり。暗るありて。同からざる。考るに一僧ありて其鏡を取て源信に与ふ。源信うけて是を見るに。小にして而も暗るものあり。源信の曰く。我が大にして且明るものを得んと欲す。僧のいはく。但持来る横川に至て是を磨けと宣へと見るひて夢覺ぬ。甚怪して母に語るに母のいはく。鏡は智慧なり。其明るものは磨くに及ばず。今汝が幼にして智慧かし。其に引て暗るが如し。若叡山に登りて心の暗を磨ば。智明らかに發して甚思ふ所の者を得べしと。源信聞て喜びの涙時に此郷に二流の川あり。南は濁り北は清なり。日々に多くの小児と俱に其流の傍に嬉戯れ遊ぶが。程に一個の僧ありて。鉢を持来りて流に洗ふ。源信の曰其水は穢を濁せり。清きを以て洗ふと。僧戯に答ていはく。諸法本浄不浄なし。何ぞ清濁を論ぜん。源信の曰。既に浄不浄なくば。何ぞ洗ふを用ひんと言捨て。倏て礫と數ふ。僧愕然たりしが。源信の礫とかぞへるを見て

問て曰一より九に至るまで皆つの音あり。唯十ばかりつの音なきは如何。源信曰五の數に二のつの音ありと（後に源信の言葉にて僧その川を横川と云也）僧ここに肝をつぶして益奇とす故に其父母に尋ね居所を問に答曰幼少にして父を喪い唯老母のみあり。家此より東北の村に居り。貧にして客を待ぶ。師は世外の人なれば辱来臨あらば伴奉るべしと。遂に此僧を連て歸る。母に此由を告。僧母に對て曰く。此児甚だ奇器量なり。後必ず大德となん。これを吾山の叡山の大廻萬の行者なりと。良源の弟子とせんと。母過ぎし頃の夢を憶合て大に喜び。我なれて出家をなす。移る所の貴僧よろしく計らい給へと答僧數喜びけり。約して叡山に登り良源上人に如此のことを告ぐ。良源も倶に喜びて人を大和國に遣はしてこれを迎へ。此時母あらたに衣を裁てこれを着せて。告て云ふ。汝謹て良源上人に事て修学し、空しく光陰を送ることなれ他日学問成就して。名を四海に聞つるば。我乃汝を召べし。若然らざるば

是と永の別と思へべし。驚て父母の未来の苦と救へ拔んハ。是汝の力なり。恩と
棄無為ふ入。是真の孝行なり。汝それ懲よやそ。又一の錦の嚢と与へて曰。中ふ
阿弥陀経一巻あり。是ハ汝ら父の常ふ身と放ゝ ゝ ゝる者なり。今汝ふ授く。是
と誦て父の菩提と薦よと。源信ゝ ゝ ゝ是と受て。終ふ母ゝ ゝ ゝれて使の人ふ
伴ふれ叡山ふ赴ぬ。斯て程なく江州ふ着し。此叡山ふ登て良源上人ふ謁す。
良源見て大ふ喜び。孳々として教授し給ふ。此時始て自ら先の夢と解して。
切磋して怠ることなし。十三歳ふして剃髪し戒と受て法諱と源信と号ス。
良源姓ハ木津氏。江州浅井郡の人也。延喜十二年九月三日ふ生る。最應瑞
十二歳ふして叡山の理仙ふ師ゝ事。法性房尊意ふ見て受戒し。尋て
顕密の祕奥とうけ。早く博学の名と得たり。承平五年維摩會ふ勅き
南都の義昭と對論。始ハ良源の年少と侮る。後義旨深宏なると聞て。衆
徒ふ驚けり。清冷殿ふ於て法華講と啓く。應和三年八月廿日二十の名徳

と召して。分て南北ふ講問せしむ（南都の法藏と叡山の覚りやうと慶と對論して南都勝）良源と法藏と對論
し。藏負て閉口せ一時梵網戒品と誦し。數句ふいたりて光口より出。康
保三年八月天台座主ふ補せらる。山務と領する事二十年。天元四年大僧正
となり。輦と聽さる。永観三年正月三日弥陀と唱へて滅と年七十四。其容
白。道徳雄強なり。自ら鏡と把て影と写して曰く。我像と置れかるべ
邪魅と辟んと。此ふよりて模印して天下民屋の扉ふ黏る。謚と慈慧と賜ふ。
以て叡山中興と。則ち叡山第十八の座主なり。世ふ慈慧大師と称し
俗ふ元三大師と号。是右ふ所謂南都の義昭。法藏。叡山の良源ハ。時の人是を
三沙門と称。然ふ三人ふ正月三日ふ寂と奇なりと云々
偖も源信ハ学業大ふ進。其名世ふ聚ぐ。時ふ村上帝の天暦十年六月勅ふ
依て八講師となる。源信ハ年十五歳なり。機辯泉の湧ふ如くふして宮中と
鳴り動く。勅命ふして。布帛と賜て賞し給ふ。源信ハ時の面目世の聞へ何ぞ

是ふ如んや。源信母と喜びゝんと思ひ。彼布帛ふ文と添て母公の所へ遣し
かゝ。母公文を見ひ。御衣といふ紀ゆふ支と喜びゝとゝ。源信の
名聞利養の意と永く歩て。無上菩提心と相續ちゝんと思ひ。すゝちち
返書ふゝく。御身と出家ふかせゝ。父の菩提を訪ゝ。母ゝ生死の愛河と
渡ちべき船筏も賴ゝ。さゝて名利と本として。何の用も立ざる御衣
と送給るそや天眷の栄えい母ゝ志ゝ。希ゝ所ハ。名利と捨る支。増賀
上人の如くして。能父母と救ちん支と。呼ゝれ老ゝう生て此事と見ん支又難
ゝ。ざんや。源信これと聞てまゝ清素の行と篤ふ。天禄年中横川ふ
屏居ゝふひて。戒節と堅ふ。專ら修学ゝ

叡山ふ東塔西塔横川と。三塔あゝ其中ゝて横川と首楞厳院とゝふ。此
ふ在ゝる故ふ楞厳の先德ゝも。又其南ふ別院ゝて惠心院とゝふ。この
寺の院主とゝゝゝふゝ惠心僧都とも号ゝ

源信一日勸進往生の偈と作ゝて。母公ふ送ゝふ。正勸安樂國傍謝生
育恩の句あゝ又同士の衆僧とゝふ願と發ゝて。涅槃経と寫をとおのゝ一巻
ゝう。西塔の實因當時の名僧ゝ是と聞く隨喜ゝて自ゝも一巻と寫と。是ふ
於て東西の両塔助寫とゝる者數多ゝて遂ふ十五部と得ゝう。慶讃の日各写す
所の經と以て横川ふ奪ゝる。實因も第子數十人と率て来ゝて其會ふ預ゝる。然
ゝふ實因ハ原来説法ふ聞ある僧ゝれハ。大衆等ゝ。ゝ今日の講師ハ究さ
實因たゝべと然ゝふ實因講師の役と辞ゝて源信ふ推ゝる。源信固く辞ゝて
實因ふ勸ひ。實因ゝ辞退ゝく云ゝ。師ゝ座ふ昇ゝまゝべしゝするゝち
今日の法事是ゝ。我も又飯ゝんと互ふ辞退ゝて時と移ゝ。止事と得
ゝて源信高座ふ昇ゝふ。布の直綴布の袈裟ゝ。ゝ儀見温潤ゝる
ゝ。ゝ大衆ふ称ゝて云ゝく。今の迦葉ゝ。源信ゝ此經ふ値ゝるの喜
をのべて感涙ふ咽びゝ。坐中ゝも感涙と催さゝる。實因

寺に皆り人に語りて曰。源信の德義に感じ動くこと吾曹の及ぶ
所にあらずと。其推量ふかるべし。解行ともに其德ひろく四方にあまねし。大藏
經をよること九五遍。大乘小乘の法門に通ずる其奥儀を究めつ。五種法師。四種三昧
をつとめ天台の奥儀にして薫練せざるなし。良源上人の門下高弟九七十人
就中神足四人なり。孝禪。覚超。覚運源信ホなり。其中に於て源信は又魁
者なり。一年伊勢太神宮へ詣でゝ。七日の間誓を立て。出離の要路を求め
ん事を祈りけり。七日満ずる夜の夢に美しき貴女神殿の扉を開き出て。つゝ
言ふ。出離生死頭證菩提の為ならば。ホ世の要法弥陀を念ずるに如ずと。
此より後別して念佛を精修して。安養に生ずることを期せ。嘗て六波羅
密寺の光勝空也上人に問て曰。我極樂淨土を願ふ志深く侍る。往生遂
べきや否やと尋ねまふ。空也答て云く。我は無智の者なり。いかでさやうのことを
なり侍らんや。但し智者の申侍る事を聞て是を業とするに。ゆゑは生ずべき

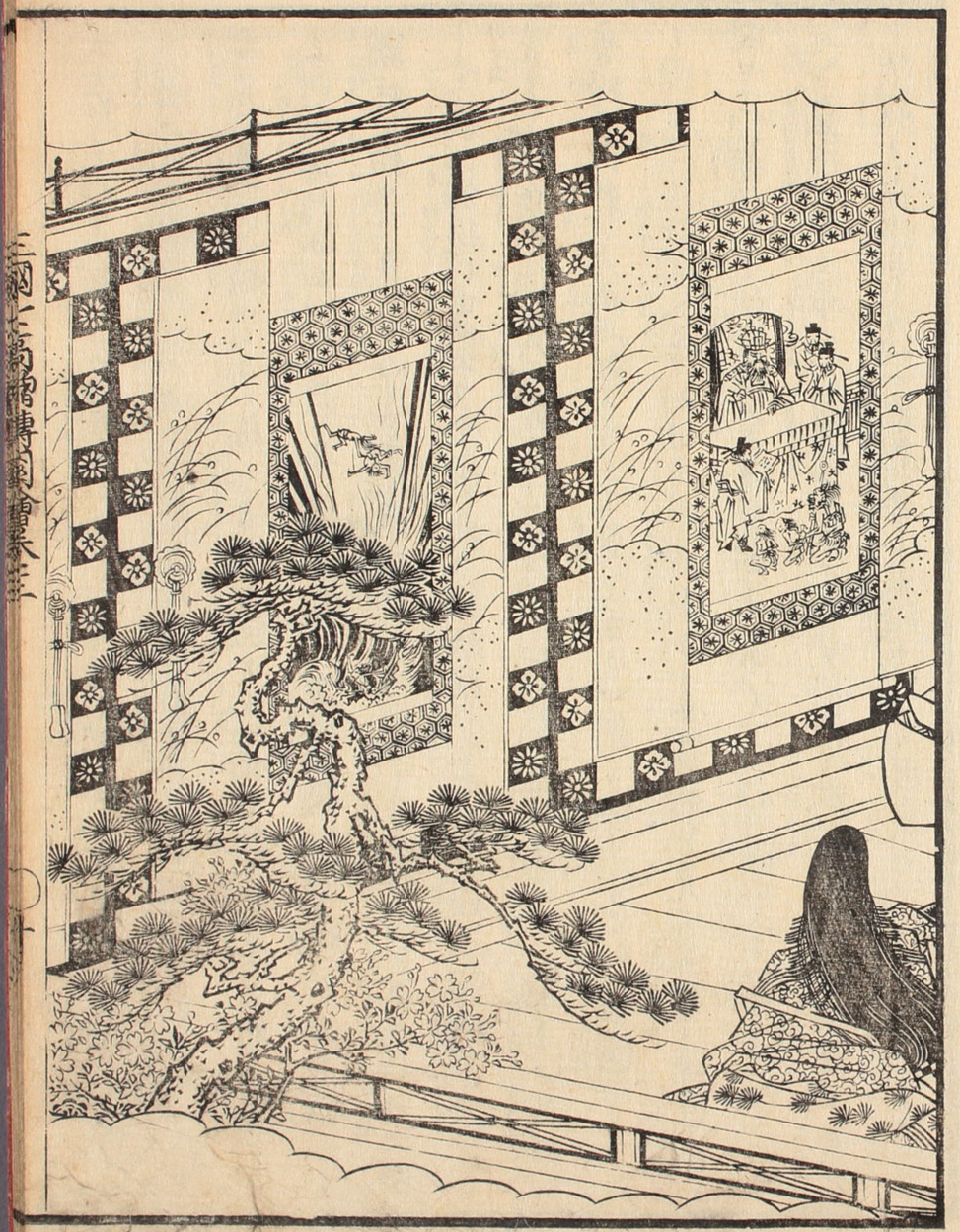
其故は人六行觀を修して。上品の定へと得んと思へば。下地は麁なり。苦なり
障なり。上地は静なり。妙なり。離なりとて。上地の賤きさまを厭ひ
上地の妙なることを願へば其觀念の力にて次第に進み。悲想悲々想まで
至るべしと。然れば極樂を願ふも又同じ事なり。智慧行德なくして穢土
を厭ひ淨土を願ふの心切なるべし。ただ往生を遂ずんと宣ひければ。源信
是を聞て。實に理究を侍りとて。涙をながし掌を合せて敬ひ尊ぶ
空也上人名は光勝ホ姓氏を詳にせず。尾州國分寺に於て薙髮し。沙弥
なり。時なり自ら空也と称せ。少して供遊を好み。天下を殆ど修行し過る
所の道路多く利潤をなす。鋤を荷ひ嶮を鑿。石を拾ひて濕ひを破れ
なる橋を再興して架。廢なる寺を修覆し。水なき地には井を穿ち。其水
必ず甘冷なり。天慶九年京に入。市中に於て弥陀の名号を唱へて勸化
ひとへんで市上人といふ。天暦九年天台ホのぼり。坐主延昌に從ひて得度し同

五年自ら十一面観音の像を刻み六波羅密寺を建てこれを安置す。播州揖保郡峯合寺に住して一切経を看讀す。又雲林院に在り時に松尾明神来現して空也の衣を假りて曾て云く奥羽の二州は佛の化する所なり少しく佛像経論を買て彼に与へよ。法を説く化に順ふ者多し。圓融院の朝天禄三年九月逝す。寿七十

永観元年九月源信年四十二歳にして故郷に帰りて母公に見えんと欲す。共に数回書を送りて帰らんことを乞へども。母公許さずして云ふ。鳥の母を捨て猶子と思へ況や人に於て。然れども母に別れて其道業を廢すること欲せず故に是を以て母公を念ずること甚だ切なり。因て思召まいまいく音信す。假令仰ぎ背くも。一たびは訪い奉ずんば有べからず。若我先に死せば後悔すんぞ及ん所詮母の許へ行かざんやとて。発足して途中にて母公の書を持来る使に逢ふ。其書に疾重し。師

宅に着母公に謁す。母公且喜び日に注て日ごとの日に師と呼て對面す。と思ひしに正に今此時なり。幸に相見ることを得る。宿縁の有ることを源信の宜く念佛すべき否や。母答曰く何ぞ敢てこれを忘れん。然るに身心労れて自警ふかるべし。又勧め勉るこれを源信即ち念佛の功徳浄土の莊厳と具に説き磬を敲して唱首とす。念佛すること三百余遍。身心苦しまず。安祥として往生す。源信の日嗟呼我を行と砥しむるは母なり。母として終を与へしむるは我なり。是母これ子。共に善友なり。蓋宿世の契なること。諸人に嗟嘆せり。永観二年十月往生要集本末六巻を草稿して。明年四月全く成就す。善導の釈義を祖述す。助ては経疏の文を以て。浄土の衆行を叙るを以て。肝要念佛一門を撰又空也の言を憶して。厭離穢土。欣求浄土を先とす。時に夢中に観音

源信の獻る十界の画圖紫宸殿にて叡覧し給ふ
圓融院
皇后詮子



大士ひらくれるひ。微笑て金蓮華を授く。毘沙門天宝蓋を捧げてこれを徒を見給ふ。
又一僧の夢ふ毘沙門天。二個の天童を引連て来て告て曰く。源信の製る所の往生
要集ハ一見一聞の儔。さらく無上菩提を證せん。一偈を加へて世ふ流布やしむべし
と。此僧源信ふ如此の由を告るこれふ依て源信一偈七言四句を加へて世ふ傳ひふ
朝廷を始め下方民ふいたるまで。風ふ靡く草の如く其化導を慕ふ。時の人稱
して真の佛復び世ふ出ずと言あり。圓融院の皇后。藤の詮子源信を請じて
宣ふく。要集の作實ふ盡せりと謂つべし然れとも庸愚の徒ハ猶未だ其趣を
會得せん。願くハ画ふあらして是を示さば解し安くして利益廣かるへし。
と因て源信定ふ入ること七日ありて眼前ふ十界の相を見て。画工をして之を
図せしむ。源信および良源覚運覚超ふおのくこれ画圖の上ふ讃をせり。こゝを
以て皇后ふ奉る。帝及び皇后ともに喜びのひて叡覧きしく。紫宸殿ふ安置
しゆ。然るふ夜深更ふ及べい悪趣の苦しの声喧々として聞こえあり。後宮の官女達大ふ

恐怖さのゝ。是ふ因て源信ふ選して數敵感あるべしとぞそれ圖今現ふ江州
坂本来迎寺ふ藏して什寶とし世ふ十界の圖と称ぞこれ其権輿さう
十界とハ一ふ地獄界。二ふ餓鬼界三ふ畜生界四ふ阿脩羅界。五ふ人間界
六ふ天上界。七ふ聲聞界。八ふ縁覚界。九ふ菩薩界十ふ佛界 以上十界則ち
寛和二年四月。源信作るところの往生要集を以て宋國の台州の周文德ふよせ
て贈る。文德これを天台山の國清寺ふ寄附を則ち當寺の經藏ふ納む。此經藏の中
ふ架三段あり。上の架ハい佛經を置。中ハい菩薩の論を置き。下ふハ高僧達の
章疏を安ず。初ふ此往生要集を下の架ふ置しゆ。その間ハいふ上の架ハあり。怪く
思ひて是を下せハ選を上る斯のごとくしたと數回ふ。因て僧徒評議をふ。
終ふこれを上の架ふ安ず。宋朝の人共ふ謂て云く此集極めて佛經と相應する
ものなりと感嘆せり。宋の帝此要集を見ゆひて。大ふ源信の德を称して欽慕
乃東ふ向ひ日東楞厳院源信如来と称しゆ。又日本小釋迦如来と称しゆ。

時に寛弘三年寂照（源信の弟子）宋國に至る。帝勅して源信の真影を見んことを望む。寂照承て日本に帰り。源信に如此の由を告。源信延圓阿闍梨を〻これを寫さしむ。宋國に贈り奉る。宋の帝ひらく〻叡覧まして宜く眸子の容子頗る真に似たり。是は真にあらざるか。其真寫なりやと得き〻欲ととて是を還し給ふ。源信その賞鑒を感じて自ら画き贈り奉る。帝これを叡覧あらく。嘆じて宜く是全く真像なりとて塔廟を建立して其影像を要集と安置し。敬ひ給ふ。正暦年中宋の朱仁聰船を汎て日本に来る。越前國敦賀の港に着し。此に泊る。此仁聰は博学にして内典外典に通ずと聞及び。源信同門の寛印とれぐ〻敦賀に至り仁聰に見へ〻り。仁聰壁に展る画像を指して曰。この婆珊婆演底主夜神は海路守護の爲に持渡る処なり。二師知るや否やと問。源信直に筆を採て華厳經の善財讃嘆の偈を画の上に書す。其文に謂く見汝清淨身相好超世間と書て後を顧て寛印に次を書べしと言。寛印乃ち書していはく。

如文珠師利。亦如寶山王と。仁聰急く驚き嘆て云く。二師の腸は大藏經の函なりと。乃ち二の椅子を設て食應し。又國産の珍種を贈る。長保二年八月弟子寂照復宋國に至源信天台の法門に世七条の疑問を作て寂照に授て四明の智禮法師に決斷を求む。又辟支佛の髪をもて贈る。智禮此問書を見て大に嘆じて曰意ざりき東域（日本）に斯る深解の人を出さんとは。乃ち答への釈を作りて還す。是よりして船の往来する毎に音問あり（此問答の事四明教行録に出す）然れども其答の釋源信の意に称ふとは。同三年三月十五日地藏院に在して端座し称名し給ふに忽ち聖衆来迎を感ず。紫雲室中に満ち。天光目を奪ふ。源信これを図し給ふ。斯て地藏院の傍に一宗を建立し。紫雲山と号し。聖衆来迎寺と名く。繪像をその中に安ず。今尚存す。又一年不二の岡に於て弥陀佛西峯の間に現じ給ふと見てこれを図し給ふ。今世に山越の弥陀の像とす。洛東某の寺に源信図する所の。山越の弥陀の像を藏む。其画像の上に両偈を題す。其辭に云く。弟子天台僧源信。正暦甲冬十二月。謹圖阿弥陀化導衆生之

相。渴仰戀慕發願而言。佛光照燿。聖衆来迎。上品蓮臺願得往生。上求下化。萬德究竟。□文珠願。□普賢行。久慕西方素無貳。弥陀誘引有時行。先芒新自眉間起。音樂忽教耳畏驚。永別故山秋月送。遥望淨土夜雲迎。直來願力吾先去。便導衆生盡往生。

嘗て亦迎接會を創り（或迎講と云又齋供類とも云）ぞ〻法樂を備へ給ふ。これを見聞るの隨喜して。おのく勝縁を結ぶ。一日華臺院にまゝして。此邊供養を修行し給ふ。真の佛来く手を授ると感じ給ふ。源信乃ち密に其像を堂の扉に圖し。旦暮を肢木に彫刻し紙に摺して施し給ふ。此邊供養の佛會今に至て西林院當麻寺。天橋立の諸所にて修行せり。原ハ此源信より始る所なり。時の帝源信の高德を嘉し給ひ屢恩遇を加へ給ひて。内供奉と〻。十禪師に補し。法橋少僧都に叙任（一日天曆十年八講師時僧都に權任）せられも素より名利をいとゝて迹を幽閑に隱し著述をもつて身の職とせらるゝ蓋佛恩を報ぜんとなり。所謂往生要集弥陀經略記一乘要決要法門對倶舍抄因明相違注釋并に疏等凡七十余部一百五十卷あり。ともに世に行はる。天台の教法此時盛なりと雖も程に笈を負ひ業を受んと。四方より来者麻の如く集。寛印紹良嚴久等ゝに當時の同門なり。海内称じて惠心院の僧都と云ふ。覚運と法義を角立て後世惠心檀那の二流と云ハ是なり。

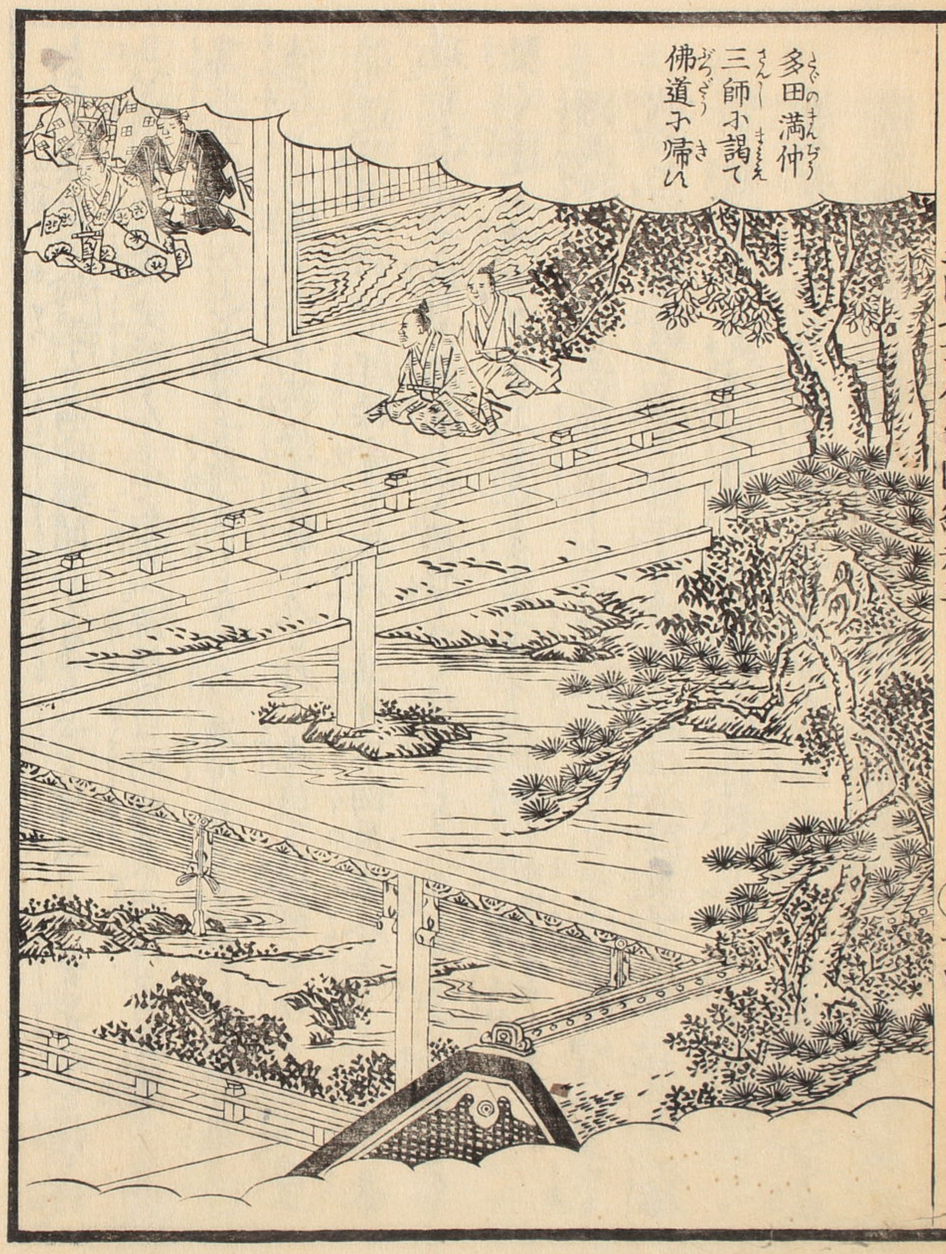
覚運ハ泉州大鳥郡の人なり。姓ハ巨勢氏幼して叡山に上る。天禀奇相ふしぎを出せバ鼻を起す。慈惠僧正これを見て必國寶とすんと云ふ。則ち慈惠僧正に事ふ。時の皇后の御產を祈り奉る。御安產あるを以て僧都に任ぜらる。是を檀那僧都と称す。一流を源信原来慈惠僧正の入室の弟子なり。その生質英敏なりしかバ蛍雪の窓の前に五時八教の奥儀を掛て明らかなり。三觀十乘の妙理ハ掌を指て委く磨ぎ八僧正と他に云ふ思召。一山も重くもて奉る。宗の法燈と云ふべきこと申す。事に付て天台中興の法將として芳名天朝まで流布し給へバ。惠心院の一流と称して。万世の亀鑑となり給ふ。

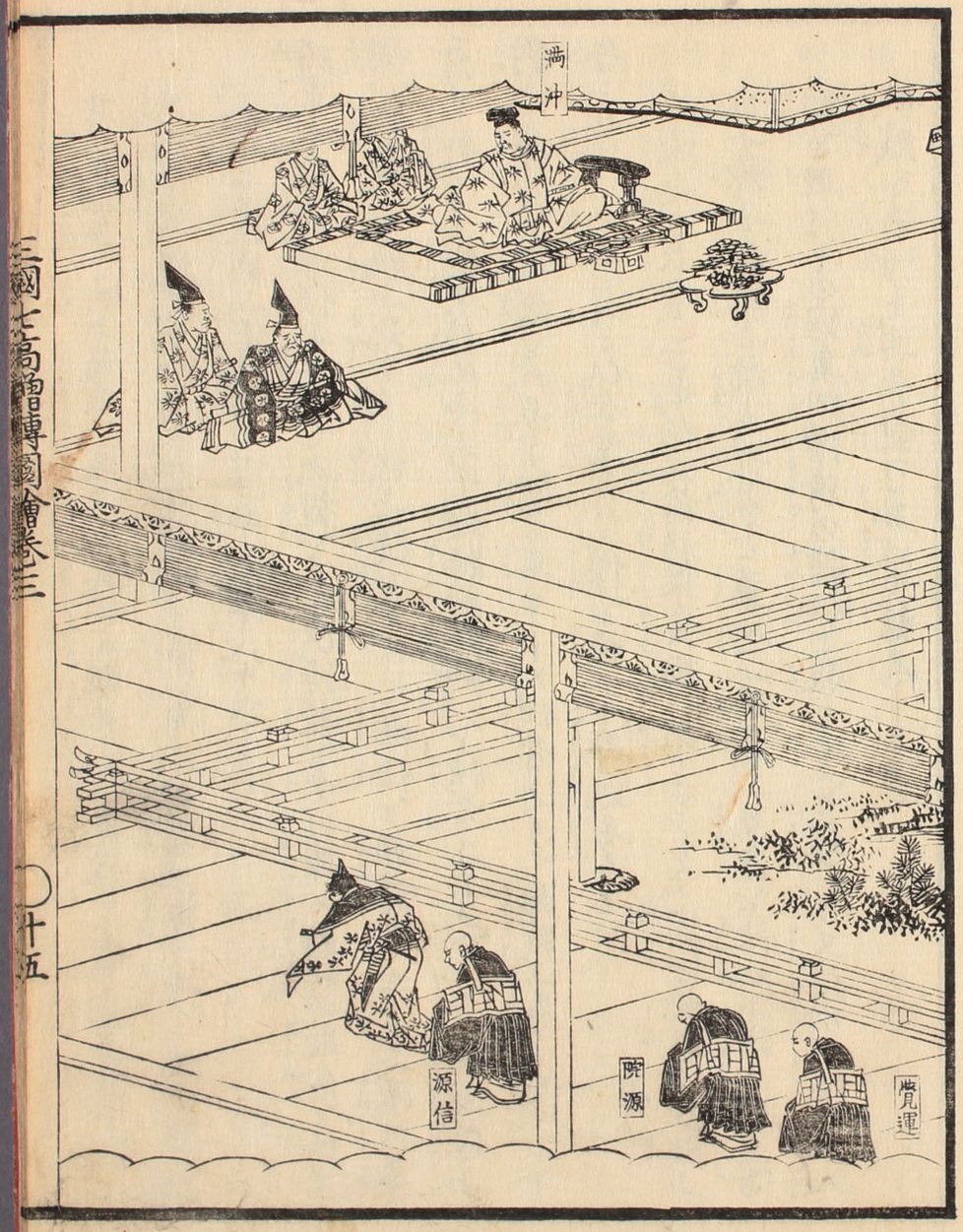
或云良源僧正教門をうけて覚運に属し、観門をうけて源信に属ぶ。これ故あるかなり。
さて程に覚運を檀那の一流と号し、源信を恵心院の一流と称して二流小異あるがゆへなり。

源信嘗て門人に語ていはく、倶舎因明は穢土に於てこれを究め、唯識は浄土を期とし、宗義は佛果を俟と。彼一乗要決は衆生皆成佛の旨とあり。定性無性の執を破ると。夢に馬鳴龍樹の二大士頂を摩て讃嘆し、傳教大師合掌して告く。吾山の教法今汝に附属すと。夢を見ては又八塔和讃を作て普く諸人に施す。深義解し易く遠近これを慕て唱ふ。時に摂津守源満仲仕へを致して摂州多田の別荘に住居し、素よりその性勇敢にして常に遊猟を好む。殺生を楽とす。其息の僧源賢これを諫むれども用ひざれば、因源賢、源信に告げたのまれて諫る。源信覚運院源と共に多田の別荘に訪ふ。満仲云く、嘗て諸師の道名を聞およびこれを慕事久し。幸ひに今日の来臨、老父がよろこび何事か是にしかん。別室に誘ひ数食應あり。満仲嘗て弥陀の像を図し、法華経を写しおはしまして見せしめ、又釋迦の像を出して併に慶讃をなす。各其意に隨ひて之に讃を斯て院源講師

とりて法要を論説す。満仲聴聞して忽ち心をひるがへし、只管先非を悔て終日を撰んで祝髪受戒せんことを乞ふ。源信の曰則明日は吉祥なりと。蓋しこれ其志の変ぜんことを慮りて斯言をなす。乃ち満仲その言に隨ひて翌日薙髪し法名を満慶と号す。其僚属数十人これに従ひて出家す。次日源信密に覚運院源と謀りて迎接會を執行す。満仲不図異楽合奏し、聖衆来現するを見て驚き感泣して、地に下つて礼拜す。信ますます堅く遂に減罪のために法華三昧院と号す。今の多田院これなり其始なり

源満仲は清和天皇の曾孫にして六孫王経基の子也。延喜十二年四月十日に生る。武名を以て世に顕る。曾て鎮守府将軍正四位上陸奥守に任ず。村上帝天徳四年、寇盗あつて夜満仲の宅に入る。満仲これを射殺し、遂に其黨を索得す。冷泉帝の安和二年、左大臣源高明太宰府の権帥に左降せらる。時に源繁延等叛心あり。満仲ひそかに奏して乃ちこれを捕ふ。其黨甚多く殆天慶の乱如し。満仲


多田満仲
三師ヲ謁て
佛道ヲ帰ル


満仲
源信
院源
覺運

其弟満季と共ニ藤原千晴及び其男久頼並ニ僧蓮茂ホと執ふ皆其罪ヨ伏セ
其後貞元二年八月十五日歳六十六ヲ以て剃髪し法名満慶と号して多田の院
ニ居と長徳三年八月廿七日卒と年八十六と云
将軍平維茂源信ホ謁して止観と授ひ浄教と受け預め臨終の助念と約す
時ホ病發して既ホ危うし程ホ使を遣して源信と招請す。ヲるホ源信事
あって赴くと能はず。之ホよりて迎接圖（菩薩来迎の圖）と使者ホ与へて云く此画像ホ
對し身心と修攝せば是ヨ加ふる事なしと使者ヲ以て維茂ホ与へ
告る。維茂大ホよろこび合掌して像と禮し即逝去と云
平維茂ハ義忠が子也。伯父前将軍貞盛の養子となり字と餘吾と云ふ故ホ
世ホ餘吾将軍と称す。武名を東州ホ恭ふ。一旦身と池水ホ潜め急遽の
難と避け。その寇奥州澤胯の諸任と殺すと得たり又信州戸隱山ホ入
妖賊を退治す。其勇鋭の氣以て観るべし云々

都文士八一條帝ホ仕へて。位三品ホ至る。儒行をもって名あり。常ホ佛法と
謗と甚し。老て重病ホ悩む。其子宰相高明。源信と迎て父ヨ教諭せしムを
乞。源信乃ち往て文士ホ對して謂て云く。我公ホ托し紀古人あり。故ヨ煩を来る所
不圖公重病ヲ以て云と言べし。文士の曰く。ヲるる修ヲ。疾ひ苦しかるべ
具ホ告ふ。源信云く此項佛閣と建立せり。公の詩を得て。ヲって壁ホ貼置度
ホ乞と。文士云く其望なしホ何の詩ヲる哉と。源信云く九品浄土の相と賦
せんと欲して。文士の云く。我さしホ其相と知らず。粗その旨と語ふ。と源信則
詳ホ逆悪往生のことを以て曰果應報毫髪と錯ぐると説く。茲ホ文士
の文士と忽ち邪と悔ひ。正ホ改め。終ホ念佛して逝去と云
少丹記慶保亂ハ文ホ於て。當時雙ヲ。寛和年間出家して法名と寂
心と号す。源信ホ就て西方浄土往生の要決と受。一日参坊して師と謂ふ。源信
其時水想觀ホ入り。是ヨ以て齋の一室一圓ホ變じて水ヲる。寂心ヲ

傍に有あふ枕をとりて。彼水中に投こむ。翌日又寂心参りて師まうす。源信曰く
我昨日水想觀ふ入と。汝水中ふ枕と投。其まつ我胸ふ中て痛太し。今又水想
觀ふ入べし。其枕を取除べしと。結跏趺坐して定ふ入たまふ。容漸ふ滅て室中一圓の水と
なる。稍て復まて浴ひ出さる。寂心直ふ取除く。源信次ひて本色を顕しいます
痛さて快しと言る。如是坐禪觀法も自在を得ぬ。自力の成し難きことを
悟て予る如き頑魯のものに。豈敢てせんやと宣ひて。西方の往生を願ひ。一切の
群生を勸む。真如觀と修とる。文珠菩薩身を現して。實相を南溟の濱
ふ說る。又源信の道德高くして。普く神明感應ひ就中吉野山ふ詣ふと。
權現巫ふ託して法義を問示す。源信宗儀を問ふ。其ふ對へ。又加茂の神祠
ふ詣ふ。深更ふ及ひ明神ふ帳の中ふ。和歌の下の句を吟じ給ふ。其句ふ
「常なる世ふ心をとめふ　源信」と敢てその上の句を續て
「月花の情もとてあるべき」此と紀あり。面白しくと簾の中より。嘆賞ま

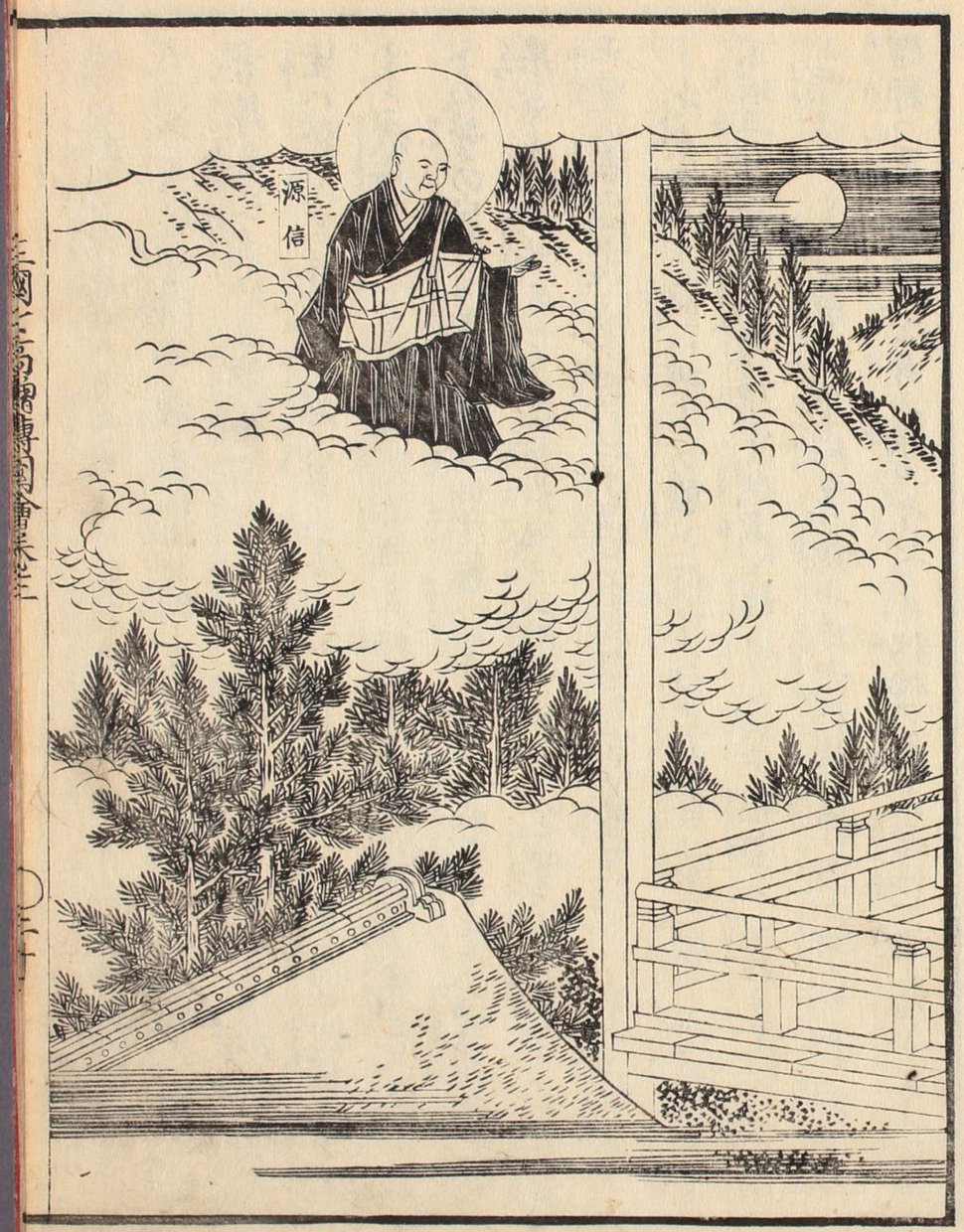
しまして。外ふ聞えしと。寂心ふ有て共ふこれを聞しと
又西海道を循歷して名山ふ登り。靈窟を探りて。神人影のごとく從ひ道路
を守護しまし。或は深夜ふ獨坐して法義を思惟しまふ。證文を尋んと思召バ
忽火来て杭の上をてらす。其余ひまて冥應あるも。匿して語ふたまふ。
寛仁元年源信疾ふ罹ひて。念佛をとなへ。隣寺の僧夢
ふ金色の僧堂より下ふ。源信合掌して微笑てこれと語ふ。又或ふ夢ふ
源信蓮華の上ふ卧して。其傍ふ數万の蓮華を生ず。人有て問日此蓮華ハ
何の用ふやと尋ふ。忽空中ふ声あつて云く。これを極樂淨土とす。
妙音菩薩の来現しまふ所の蓮華なり。當ふ西ふ向ふて去るべしと。往生の
二三日已前より。病惱こごくく治して。身躰平日の如し。一旦院内の諸衆を召て
告て云く。今生の相見今日限なり。宗教ふ於て疑なし。是を問ふて
決せんとする程ふ大衆旦問旦泣。源信一一ふ辨へしまふ。既して氣息疲れ

給ひて。大衆を退けを獨上足の弟子たる慶祐と留めて謂て曰。我一乘の善根事理の功德とを以て極樂世界に回向を而して今二天童降て告て曰。我は彌勒菩薩の使なり。師は法華を持て善一乘を解を。此功德を以て當に天宮に生をべしと。よりて數万の天子幷に迎んとす。故に我等先これを報ぜと。これ答て曰く。兜率天に生ぜんと希ひぐるに非ずと。いへども我平生の志願は彌陀の佛國に生ぜるにあり。願くは彌勒慈尊の力を加へ給へ我を西に往生せしめ給へと。天上より我願意を申上のべと是に天童空に昇去。忽觀音大士來現して是我素よりの意を失らざる所なり。汝よく是を記せと有けり。慶祐涙をながし隨喜を。源信をおいて定印を結んで端坐し。面善圓淨如滿月の偈文を唱へ念佛して往生しぬ。此歳後一条院寛仁元年六月十日寅時。壽七十六僧臘六十四。衆徒悲く號ぶ。寺院と動ずがごとし。時に天の音樂空中に聚て。香四方に薫じ或は音樂の聲西より來るあり。

東より西に去ると聞く。艸木ともに悉く西に靡く。源信嘗て三井寺の慶祐法師と親しく談ひ。互に先達て往生をの必ずとの生る所を告べしと約をなり。此曉慶祐後夜の行法をつとめんとて堂の椽側に出て阿伽の水を嘗ずに忽に源信白雲に乘じて告て云く。我は是故佛靈山の聽衆化緣もとぶに今本土に還ると見る（一は我は本極樂久住の大士化緣已に盡く本國に還既と或傳に是源信の辞世の頌也と）曰て使と横川に遣して源信を訪ひ。に師とぶに今曉命終せりと。其後一時楞嚴院に於て往生要集を講ずに。夢に神僧の形を現して告て云く。我は是源信今極樂界に新華聚菩薩と名づく。汝要集を講ずる隨喜に勝れ。故に未て告とぶ。抑源信若年より淨土の業を修して暫くも懈らず。自記して曰く一生の念佛總計二十俱胝遍と。弟子その記を遺る箧の中に得ると。又常に佛像を彫刻して。或は画て數しる。又千体佛を造りて諸國に領ち安置ること凡三十八ヶ所あり。其余傳持の殆海内に遍しと云々

偖又往生要集ハ始て厭離穢土欣求浄土の旨とをやして。菩提心を勸るふ故ふ前よいるどく。十樂の相と始ふあげ。次ふ極樂の往生ふ就て。十樂と挙たまふ。されハ源信の在世ふ於てハ圓融帝の御后藤の詮子御所望ふよりて。地獄餓鬼畜生等の形勢と繪ふかゝせ。敵覽ふそるべくふ帝と共ぢ奉と居方ふいるまで。拜見まゝ御感のあるう。紫震殿ふうけおきるふ毎夜深更ふおよんで。地獄の責苦餓鬼の苦〻各聲と発〻。宮中の諸人肝を消し魂と失ひたまふ。故ふ恵心院へ返せるべくふまとふ厭べきハ三界六道の分野ふ。故ふ經ふハ三恵安きふ。猶〻火宅のごゝと說たまへり。三界とハ地獄餓鬼畜生修羅人間天上是と三界六道とハ。又穢土とも。其中ふ人間天上ハ善趣〻。地獄餓鬼畜生修羅と四惡趣とハ。尤厭離るべき所なり。此故ふ集るまづハ大地獄と始めて。十六の別處ふ至るまで委〻是と示されり。六道生死の人間界ハ隅生即忘の故ふ前生のこと知ぞ。未来又尚知ること能ハ故ふ動もすれバ有無の二見ふ隨〻。或ハ已ぐ〻ぐるとして佛說の三世の因果と信ぜ〻して。徒ふ悪業と造りて空〻く三塗ふ沉む。佛これとあはれみて慇ふ教へ。大法ふハ現ふ王法の牢獄ぞ。此世ふ今眼前ふ罪と犯す時ハ王法これを免さず。火罪斷罪ふあるふ。顯明之罪人得而誅之陰伏之奸鬼得而誅之と現ふ顯たる罪ハ人の誅する所〻。竊ふ公の責ふかゝるべき心口意の業ハ己が魂〻知て。未来の誅と受。皆人の知る所ふ非ず。公〻牢獄とかまへ。征罪の律と定めて待ふふ非を。尚善人と入る牢獄もう。又罪ふ者と行ふ征罪もなし。皆是自業自得ふて自ら作る牢獄。つゝ〻ふ征罪討〻ぞ。此理とをして来世の獄苦の道し難きと知て。佛ハ意と苦〻め教諭まゝ。是と以て源信の其佛語ふ依ひ。多くハ正法念經の意ふ。六道の苦相と具ふ示して。厭離穢土を勸ふ。もるふ。ひとら若厭離の心と起をゝ。自力修道ハ源信尚及ぶ〻。是ふ往生極

源信往生して
三井の慶祚を
謁す
慶祚


源信

楽の教行は濁世末代の目足りて道俗貴賤誰か皈せざらん。偏に弥陀の誓と
たのみ。専ら念佛して極楽往生を願ふべしとなり。誓とは弘誓といふこと。廣
普縁名之為弘自要誓其心名之為誓と釈して。第十八の願の十方衆
生は弘の字の意。善人悪人男子女人。かちいうなりもし心は何程浅き
ことも我浄土に生ぜさせたまへ。阿弥陀仏と呼ばるまと仰られしが。廣普の縁とふ
この誓の字は自要誓其心四十八願一一に此通と成就せどんば。法蔵比丘て朽
果なり。此願満足せざるんば阿弥陀仏は成べからずと誓なりてその不取
正覚の言は四十八もに有とぞ。若不生者の言と置ぬ。は第十八願なり
なりて。余の四十七願は此十八の願と信ぜらるる為の帰墓の願なりて。若不生者
不取正覚我誓願と信じて我名を称するものを極楽に生れざるんば。阿弥陀
と呼れまいらせある肝心の誓約なり故に第十八願を押立て勧めなり。尤源信
僧都は。天台の宗風を身に觸るるとも化他の為には念佛を本意とする。故に

其宗風を改めずして念佛往生を勧めるる。則源信僧都は極楽久住の菩薩なりて
還相回向の出世なりて化他なり。行住坐臥に他事なく念佛
して往生極楽の思ひ常に絶ず此をもつて往生要集に云く飢て食を思ふ
如く渇て水を追ふ如く或は頭を低て手を拳或は声を挙て名を称ふ。外義は異
なれども。心念常に存して念々に相続し。寤寐に忘るること莫れと言へり。
寤寐とは覚てもなりされは源信は出離生死の一大事と心懸ること行住坐
臥に油断なきを。一時楞厳院の下部山より薪をとりそろへて来る。對して
問ひ給へは此僧は此ど極楽往生をべきと言ふ。下部こたへて云ふは問へき者に物と
問は尋常のまひして候ふ。されども弥陀の親類なりあれは御坊の往生極楽
を知て候ふもと申。源信言く。されは出離と一大事とは何ぞ。心もとずず
して問へる。汝が申処もつとも道理なりと言て。次の日下部山へ行どして有
られば源信云く何として汝山へは行さるぞと有られば雨ぐるるを候へと云

汝ハ昨日我往生を問ふ。弥陀の親類なるべしと龍王の親類にて有ると言へハ下部されハ候ふ。愛宕高尾の峯ふ雲のかゝるとゝろて雨のあるべきと知る雲比かゝらざるゝゝろて雨の降ずしと推量せり御坊も所ゝろて後生を御知る候と申ろ。浄厭俗物実ふ下郎の言も取ふ足れりと。源信斯の如く出離生死の菩提心ふゝくまゝまゝ。賤き下部ゝも往生を尋ねまゝ所ゝて辻占ゝを聞ゝ聞ゝ常ふて西傾く月ふ。往生の心いやまゝろう管絃絲竹の音ふ。来迎の音楽と思ひ。心を澄して常ふ念佛しゝひる

続拾遺　浦やまゝゝゝる空ゝ月ゝれば心のまゝふ西へ行らゝ弁　源信

新拾遺　夏ゝろと知ゝゝふ西と思ふ哉裏ゝく弥陀を頼むゝれば　仝

一説ふ源信僧都隠道の後名利の二字を大字ふ書て。居間の壁ふゝう常ゝ礼拝ゝゝふ。人ゝその故を問ふ。僧都云我名利の修学を好みて昼夜怠ず。学ひる故ふ遂ふ出離の難ゝゝと知る。名利ハ怨ゝとゝゝと辨へゝふ

ゝう斯道心堅固の身とゝゝう。尓れば名利ハ息極めて重ゝれば。常ふ礼ゝゝと言ゝゝとぞ。又西行法師の撰集抄ふ恵心僧都横川を御身没ゝふ。胸の間ふ青蓮華三本侍ゝゝう。奉ゝゝ。此事世ふ聞ゝゝ。君ゝゝ彼蓮華と召ゝゝふ。北嶺の衆徒会議して進ゝすゝ。固く辞ゝれ。されハ一本奉れと命下ゝゝ時。学徒心得ゝ一本を進ゝせゝゝ。残る二本文珠樓ふ籠侍ゝゝ。君の召ゝゝる蓮華ハ御堂の大殿道長ハ帝の外祖ゝゝゝる程ふ其御方へ傳ゝゝると。宇治殿頼道の御代ふ。平等院の寶藏ふ納められ侍ゝゝゝう。実ふ有ゝゝ例ゝゝ。是僧都平生往生の信心浅かゝず一生ふ退ふ称名ゝゝふゝ。佛智回向の御慈悲の顕ゝゝゝ。されハ此ゝ一人佛名を念ゝれば。西方ふ便ち一蓮生ゝ。但一生常ふ不退ゝゝゝれば此花還ゝ此間ふ到ゝ迎ゝゝ。法照禅師ハ弥陀の化身。善導の後ゝ天下ふ知ゝる者ふ。其人此事を說ゝれば。信ゝゝふ堪ゝゝ。又蓮ハ佛座ふゝて

法ゝ心ハ祝ゝ心ハ蓮の生ぐるハ。祝法一体の佛智の顕るゝ

源信僧都自画自讃の文ハ

三悪道へ出く人界へ生ゝ

畜生ハ劣ゝ。家ハ貧ゝれども餓鬼ハ勝るべゝ。思ゝ叶ぶ

も地獄の苦ハ〻〻ゝ。世の住ゝ厭便ゝ。信心浅ゝれども本願

深き故往生疑ゝ。妄念ハ本来凡夫の地体ゝれば。忘念の外ハ心ゝ

臨終の時まで一向忘念の凡夫ゝて有ゝと思ゝて。念佛ゝれば浄土ハ参

べゝ。蓮華ハ象ぐる時ハ忘念と申ぐべゝて悟ゝるべゝ。妄念の中

ゝり申出る念佛ハ。濁ハゝぬ蓮の如くゝて往生決定疑ハゝ

三國七高僧傳圖會本朝之巻横川終